

ラジオトーク「まち歩きを楽しむ」

放送 2012年12月2日 ならどっとFM

出演 浅野詠子（フリージャーナリスト）

川上文雄（奈良教育大学教授）

岡崎喜和（奈良教育大学2回生）

川上 こんにちは。奈良市民歴25年、奈良教育大学の川上文雄です。学生たちとつくったラジオ番組です。題して「まち歩きを楽しむ」。4回にわたって放送します。第1回の今日は、フリージャーナリストの浅野詠子さんにお話しをうかがいます。

浅野さんは地元の奈良新聞記者として20年以上にわたって、奈良県の各地を取材しながら、色々なところを見てこられた方です。4年前に新聞社を退社した後は本の執筆、講演活動などをされてきました。

これまでお書きになった本のひとつが『奈良の平日』です。まち歩きの楽しさを教えてくれる本で、1年前に講談社から出版されました。2009年から2012年まで、奈良教育大学の環境教育コースで授業を担当して頂きました。

浅野 奈良観光のデータはちまたにあふれていますが、私は路地裏に隠れている人々の奮闘ぶりを物語にしました。本日はよろしくお願ひします。

川上 『奈良の平日』というタイトルがとても印象的です。そしてサブタイトルも「誰も知らない深いまち」。本の帯には「世界遺産の隣にある奈良」とあります。土曜、日曜、祝日の奈良は、とりわけ多くの観光客が訪れて、誰もが知っている世界遺産を見て歩きます。そうではなくて、平日の奈良を歩く。すぐにわかる素晴らしさではありません。時間をかけてつきあううちに、じわーっと味わいが出てくるような私たちの身近なまち。そうした日常生活の中にすがたをあらわす奈良。それに気づかせてくれる本だと思います。

ではまず、今年度前期の授業を受けた学生の一人から質問をしてもらいます。

岡崎 こんにちは。奈良教育大学・環境教育コース地域環境専修の岡崎と申します。私たちは浅野先生の授業から数多くのことを学びました。浅野先生自身はどのようなことを思い、私たちの授業に携わっていただいたのでしょうか

浅野 授業ではまち歩きを重視しましたよね。古いまちですから、市街地なんだけど、色々なお地蔵さんに出合いました。どれひとつとして同じものはありま

せんでした。ある学生は、廃業した銭湯の煙突の景観がいいと推薦してきました。そして、その建物の玄関の前には、ベンチとか灰皿とかが残っていて、何かそこでコミュニティがあったことうかがわせます。学生は詳細なスケッチを残しました。まちで残したい景観とか風情をどうやって守って、地域経済に活用していくか。それにはまず、自分たちで名前をつけることが大事だと思います。そして活用策も自分たちで提案できたらいいと思います。

たとえば屋外広告物のあり方も市役所に決めてもらうのではなく、「なつかしさ基準」とか「レトロ基準」とか、地域の人々の発想で条例ができたらいなと思います。つまり授業の狙いですが、地域資源の発見活動は、地方自治、地方分権を学ぶことであります。

岡崎 浅野先生は『奈良の平日』をはじめとしてさまざまな本を書いています、そんな先生が私たちの授業を通して新たに知ったことや興味をもったことについて教えてください。

浅野 本当にたくさんありました。授業では、フィールド・ワークでは300メートル四方ぐらいに場所を分担して、数人ずつの6つの班で歩きましたよね。できるだけ観光地をはずして、JR奈良駅の東とか、三条通りの南とかを歩きましたが、ある学生の班が古い赤レンガの断片が残る駐車場を発見してきました。

そしてその土地の履歴について、大学の隣にある奈良地方法務局という官庁で古い土地台帳を調べましたよね。そうしたら驚いたことに、なんとそこは、明治時代の名物市会議員だった吉村長慶が一時、保有していた土地だったことが分かったのです。

ただ、赤レンガとの関係はさっぱりわかりませんでしたけども、そのまちを歩いたときに、吉村の記憶を宿している場所を歩ける、それは学生たちの発見によるものです。ふだんの授業は、本のなかで学ぶことが多いですが、私たちの行ったフィールド・ワークは、教科書にない衝撃、その連続でした。

川上 先ほど地域資源の発見とおっしゃいましたが、そこをもう少し補足してください。

浅野 冒頭、川上先生がご紹介してくださった『奈良の平日』ですが、私自身が発見した地域資源もありますが、それだけでなく、地域資源を発見した人々を発掘したことに力を入れた本だと言えます。具体的には、壊される寸前の近代建物の価値を拾い上げ、運動し、保存に奮闘してきた人々の足跡も記録しま

した。古い交番とか駅舎とか文豪の旧居などです。

私たちのまちには、古代の文化財を守る使命があるなかで、世界遺産の隣で息づく小さな近代の建物の風情を伝え、取り壊したら二度と復元できない価値を私たちに教えてくれた人々を追いかけました。

川上 『奈良の平日』のあとがきに、歩いて気持ちのよいまちづくりという言葉が出てきます。印象的です。これについてすこしお話頂けますか。

浅野 そうですね、整然と区画されたニュータウンとか、再開発のまちよりも、何か面白いものに出くわすのは、きまって細い道ですね。私は細い道を歩くのが大好きで、そこにはお地蔵さんとか、神社の祠とか、寺の小さな塔頭とか、猫がいたり、昔の蚊取り線香の看板があったり、面白い商店があったり、ほんとに色々です。それを考えてみますと、開発指導要綱の6メートル道路が似つかわしくない地域もあるだろうし、むしろ自動車の側が不便になって、一方通行の道ももう少しあったらいいのではないのかなと思ったりしました。

先ほど、整然としたニュータウンは魅力が乏しいように言ったかもしれませんが、40年、50年たった、例えば学園前などは、独特な風情が蓄積されていると思いますね。ですから歩いて気持ちのよいまちづくりというのは、道路の狭さもそうですが、まず人が住んで、使われ続ける。使い込まれた生活景観ということですね。

川上 歩いて気持ちのよいまちづくりを私なりに考えました。浅野さんの本は、「まち歩きの手引き」だだと思います。この本を読んでから、私も色々歩かせるようになりました。本の最初に出てくる「きたまち」も歩きました。とってもいい感じのまちだと気づきました。歩いて気持ちのよいまちとは、その場所で暮らしている人がその場所を愛して、丁寧に色々なことをしている。人と人のつながりを感じて、もてなしの気持ちが、歩きながら何となく感じられる。

浅野さんの本には、路地裏の町家を改造して陶器の店を開いた女性のことが書かれています。そして、この女性に親身になって助言してくれた商店街のお米屋さんのことなども書かれています。

最後になりますが、地域資源を再発見する方法として、浅野さんはマップづくりを勧めていますね。

浅野 地域の再発見活動の第一歩は地図づくり、オリジナルなマップづくりにあると思います。そのなかに、近代、現代で失われてしまったもの、惜しまれながら消えてしまったものを入れてもいいかなと思います。例えば、ならまち

の人がつくったマップには、今は暗渠となりましたが、絵屋橋という欄干の跡、そして消えた銭湯もありました。また京終の人が最近つくったマップには、昔あった溜め池も出てきます。これは奈良盆地特有の地域資源ですね。そうしたマップづくりの活動を通して、高齢者に聞き取りをしたり、世代間交流をするのも楽しいと思います。

まちには、色々なものがあつた方がいいので、銭湯も河川も映画館も…そんなことを思いながらマップをつくつたらいいですね。

川上 どうもありがとうございました。